

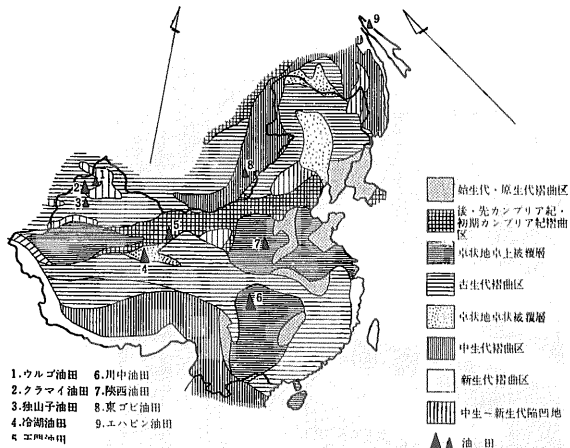
ベールを脱いだ 大慶油田

岸本文男

中国が日本に石油の輸出を打診してきてからもう3年にもなる。当時その話について書いた毎日新聞が錦西油田という耳慣れない名を挙げて「新しく発見された大規模なこの油田の開発のいちじるしい伸び」を報じ大きな反響を呼んだことは記憶されている。

この話のする前にすでに知られていた中国の油田はクラマイ油田（新疆省）・玉門油田（甘肅省）・冷湖油田（青海省）・川中油田（四川省）などで（第1図）中国の4大油田と称されていた。中国はこれらの油田の位置を公表し設備の一部の写真も平気で雑誌に載せていたしまた総生産量を推定し得るデータさえ秘密にしていなかった。だが1960年の冬（1960年初頭）から力をつくして開発していたにもかかわらず1964年5月にいたるまで位置や設備はもちろんのことその名称さえ明らかにされない油田があったのだ。それがここに報告する大慶^{グーエン}油田である。

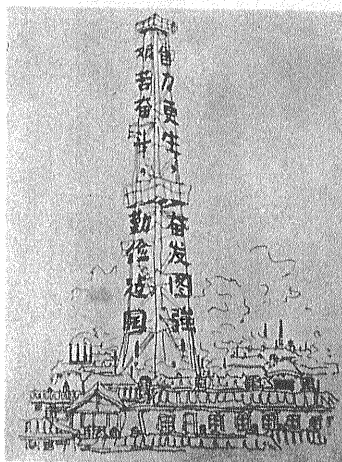
中国は「原油の乏しい国」として知られていた。たとえば1907～1949年の42年間に採掘した原油がわずか270万トン余りということでも明かなように中国は「原油の乏しい国」であった。ところが新中国の成立以来まず老爺廟採油所で少しずつ採油されていたのが拡大されて玉門油田となり次いでクラマイと川中の両油田そしてツァイダム盆地の西にある冷湖油田が開発されるに及んで中国は「原油の乏しくない国」に変わったがそれでも輸入に頼る量は少なくなかった。



第1図 中国4大油田分布図（これに大慶油田が加わって5大油田となる）

彼らのいう その外油はソ連とルーマニアに仰いでいた。しかもその大部分がソ連からであった。ところが1960年に入って突然にソ連は石油の禁輸措置を中国に対してとった。もちろん 中ソ論争に発した報復的な措置だったのだ。それだけでなく フルシチョフ氏は当時中国に派遣していた約3,900人のソ連人技術者全員を帰国させると同時に 一切の契約を破棄して 設計図とか 工場施設や部品類なども 送り返させたのである。おまけに 朝鮮戦争の時に援助として渡した武器・弾薬・医療品などの代金を一莫大な金額であった由一請求した。要するに 石油を売らず 採油をさまざまに投資の余裕を奪ったわけである。それらのためであろうか。中国各地を走る自動車はガスの大きな袋を背負い出し 北京でも例外ではなかった。それが1962年になると どこからか豊富にガソリンが送りがまれ 自動車は一勢にガス袋を棄てた。その頃の北京の様子を伝える在中國の記者たちのメモには 必ずといってよい位このガス袋を見なくなったことが記録されていたほどである。どこからきたガソリンか？ 関係部門の人々に誰が聞いてもノー・コメントで 1964年5月5日発行の「北京週報」第18号で明らかにされるまで 新油田の名称すらナゾであった。それも この最初の公表に当り1枚のスケッチ（第2図）がついていたにすぎず これだけでは新油田の様子も推定しかねたが 文章の内容は興味をそそった。その全文を転載するわけにゆかないので抜粋してみると

「大慶はここ数年のうちに開発された新しい油田で……以前は見わたす限りの荒地であった。……石油労働者の最初の1団が大慶についたとき このあたりははてしない大広野だった。当時労働者たちは つねに隣宿するというありさま いちばんよいというのがテントや掘立小屋にすぎなかった。しのつく豪雨も 身をさす寒風も 彼らの革命精神を少しもくじくことはできなかった……」 とある。 はてしない大荒野 人の住ま



第2図 最初に発表された時の大慶油田のスケッチ（副宇画く）

ぬ土地 時に襲う豪雨 冬は身をさす寒風……。そして4大油田と称されていたものとは違った大油田。草原と砂漠を渡る送油パイプ。湖中の採油槽。

今年の5月から6月にかけて 新華社通信は大慶油田の写真をたくさん発表し そのペールを脱がせた。多くの労働者が「煎餅を好む北方人であることも明らかにして。実際の開発ぶりにもふれ 1960年3月に玉門油田とクラマイ油田からやってきたさく井隊が協力して 第1号井の噴油をもたらしたこと 採油設備や精油施設は上海の労働者が製造した「自力更生」の産物であることなどを示しているが この大慶油田の開発こそ 中国の自動車からガス袋を取り上げただけでなく ジェット機の燃料を確保し 人民公社のトラクターや揚水ポンプの活動を保証したのとして 誇らかに述べている。そして 日本に輸出してもよいという。

この大慶油田で働き 労働英雄その他の表彰を受けた者が すでに1万人を越える由 何度も重ねて功労を讃えられた人もあるに違いないが それにしても いったい何万人働いているのだろう。

まだ位置は公表されていない。しかし 発表文の表現やあるいは写真から考えると もはや公表されたに等しかろう。とっくりと 写真をながめていただきたい。

寝言になるのかも知れないが 今にして思えば 大慶油田の名が明らかにされる前に 関連のある一連の発表があった。ただ 当時はピンとこなかっただけである。

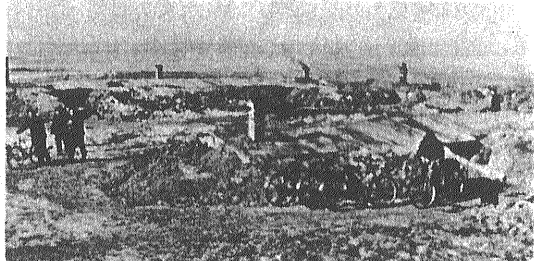
たとえば 1963年10月1日付人民日報の社説に 「石油・化学・鋼材などの稀有品種の生産能力にも新しい発展がみられ……」とあったし 同年9月15日の朝鮮における劉少奇演説の中にも 「中国で急速に発展しつつある石油工業は いま一連の新しい油田を開発し 現在ある油田を拡大している」とあり また 北京周報1964年1月7日号においては 「1962年の石油工業の基本建設の規模は過去のいかなる年よりも大きかった。1963年に建設された精油設備の総生産能力は1962年に新たに建設されたものの5倍にふえた。一つの大型精油工場を建設するための投資と時間は今までより少なくなった。中国の専門家によって設計されたこのような工場は 中国の精油部門の最新技術の成果を十分にとり入れている」と述べられているし 1963年末の全国人民代表大会のコミニケには 「中国の必要としている石油は 今では基本的に自給できるようになった」というくだけりがあり 人民中国1964年4月号には 石油科学研究院副院長侯祥麟氏が寄稿した文の中で「玉門油田は戦前の数10倍の産油であるが それでも中国最高ではない。採油量はもちろん 規模の点でも 近代化の点でも新しい油田は玉門油田をはるかにしのいでいる」ことを明らかにしていたのである。

結果論であるが 中国人の書いていることには眼光紙背に徹しなくてはならないらしい と思っている。

(筆者は鉱床部)



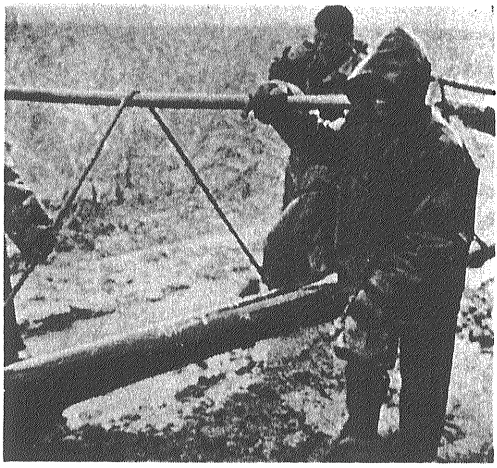
林立する大慶油田の油井



開発初期の住宅 厳寒にうちかつために地中に穴を掘って住居とし大草原に根を下していった



大慶油田開発に出かける若者たち



最初の雨季 労働者たちは大量の資材を肩にかついで現場に運んだ



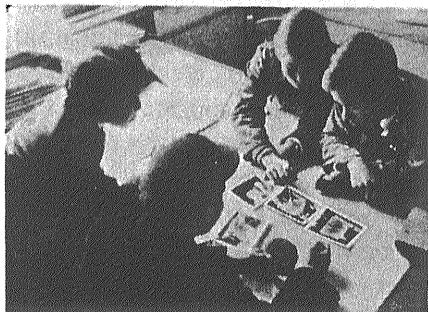
第 1 号 井 の 噴 油 成 功



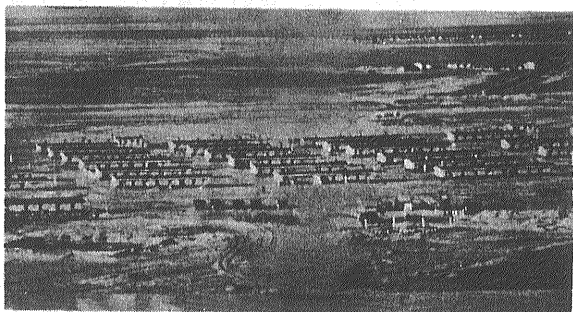
労働英雄 王進喜 鉄人とよび王門油田から大慶に最初にのりこんださく井隊の隊長



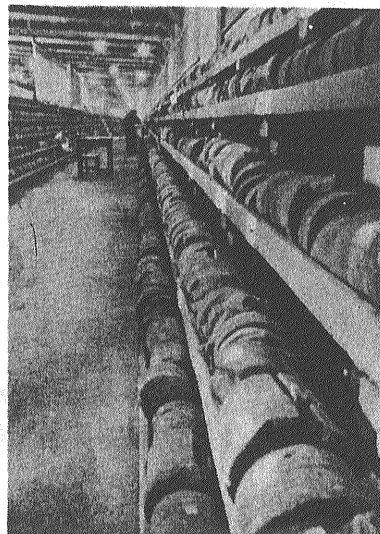
さく井隊の作業ぶり



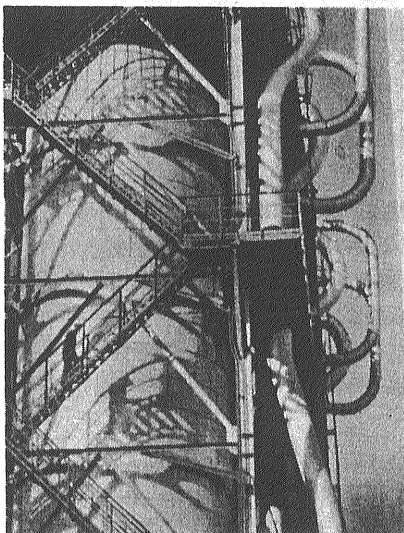
地質調査隊員の室内検討会



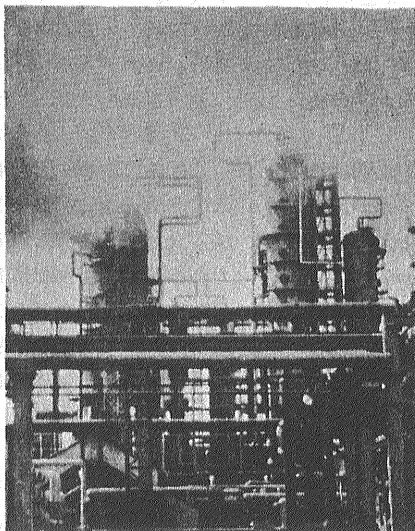
大慶の住宅地



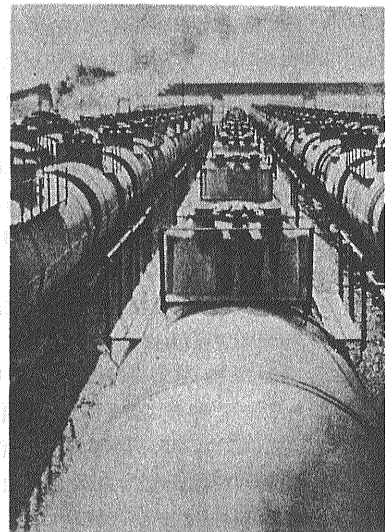
大慶油田の岩芯室 ここには50万m分のコアが保存されている



大慶製油工場の「遅延焦化」塔 原油かすからコークスを作る設備



製油工場の一部



中国の各地へ原油と精製品を送り出す油槽列車